

ドイツのライプニッツ研究の現在

酒井 潔

はじめに

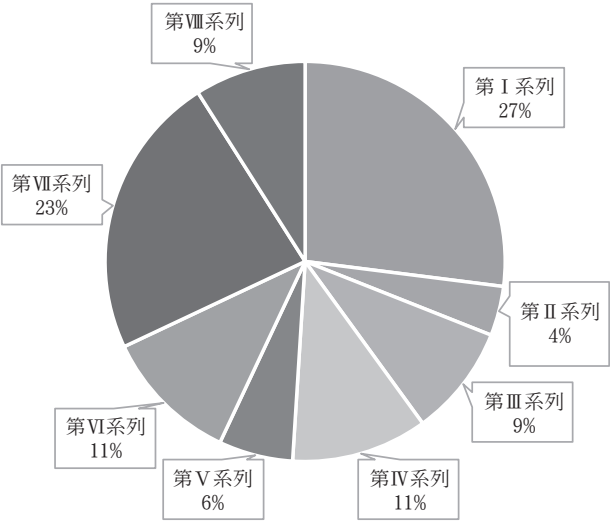
ドイツはライプニッツの故国である。当時の政治・社会・文化的制約下、彼の著作や手紙のうち母語で書かれたものは10%台にとどまるが、にもかかわらず活動歴、思考様式、帰属意識は彼がドイツ（またはドイツ語圏）の普遍学者（polihistor）であることを示している。そこからドイツ人は、ライプニッツの遺稿や資料の保存、全集の編纂と刊行、そして国内外における研究の興隆に責任を負うと考える。その点は他国のライプニッツ研究には見られない固有な特徴であり、多少の温度差や変化はあれ、基本的に今後も継承されて行くだろう。

ハノーファーにはライプニッツの遺稿を収蔵する旧王立図書館（現ニーダーザクセン州立図書館）があり、18～19世紀にはその遺稿を用いた著作集として、グーラウアー版、ラスペ版、エルトマン版、ゲルハルト版、クロップ版等が編纂・刊行され、ライプニッツの伝承と研究に画期的な役割を果たした。そして1923年にはドイツの国家事業としてアカデミー版全集が開始され¹⁾、以来幾多の困難を乗り越え、現在は四か所の編纂所に

1) 元は1900年に独仏の共同事業として発足したが、第一次世界大戦により中止された。

【付表 1】 アカデミー版全集におけるライプニッツの著作および書簡の内訳

第Ⅰ系列	一般・政治・歴史往復書簡	第Ⅱ系列	哲学往復書簡
第Ⅲ系列	数学・自然科学・技術往復書簡	第Ⅳ系列	政治著作
第Ⅴ系列	歴史・言語学著作	第Ⅵ系列	哲学著作
第Ⅶ系列	数学著作	第Ⅷ系列	自然科学・医学・技術著作



【付表 2】 アカデミー版全集（全 8 系列）の進行状況（2023 年 8 月夏時点）²⁾

	計画巻数	既刊巻数	完結予定
第Ⅰ系列（Hannover）	35+1	26+1	2037 年
第Ⅱ系列（Münster）	6	4	2029 年
第Ⅲ系列（Hannover）	12	9	2032 年
第Ⅳ系列（Potsdam）	15	10	2040 年
第Ⅴ系列（Potsdam）	8	0	2055 年
第Ⅵ系列（Münster）	14	8	2035 年
第Ⅶ系列（Hannover）	30	7	2054 年
第Ⅷ系列（Berlin）	12	3	2055 年
全体	133	68	2055 年

において、2050 年前後の完結を目指し、調査・研究と編纂作業が日々進められている。

こうした固有性をもつドイツのライプニッツ研究は、アカデミー版全集の編纂・刊行と、ハノーファーのライプニッツ協会という二つの基盤の上に展開されている。

以下の報告においては、第一に、アカデミー版の進捗状況と、ライプニッツ協会の活動について概観する。第二に、とくに最近 10 年間におけるドイツ語圏のライプニッツ研究の全体的な動向について考察し、近年の主な研究成果および今日注目を集めている諸テーマに言及する。第三に、今日のドイツのライプニッツ研究が直面する課題または挑戦について、たんに傍観者の視点からではなく、彼ら自身の受け止め方や期待に焦点を合わせて報告する。そして第四に、ドイツのライプニッツ研究の方向性や価値観を代表していると思われるシェーパースの生前最後の講演（論文）からその主旨と特徴を紹介し、結びとしたい。

I. アカデミー版全集、ライプニッツ協会（ハノーファー）

1・1 アカデミー版（*G. W. Leibniz. Sämtliche Schriften und Briefe, Berlin 1923-*）

ライプニッツの 20 万枚の遺稿、そして 2 万通の往来信の、批判的校訂版であるアカデミー版の編纂・刊行は、連邦と州の（つまり 100% 税金による）事業として、ハノーファー（第 I, III, VII 系列）、ミュンスター（第 II, VI 系列）、ポツダム（第 IV, V 系列）、ベルリン（第 VIII 系列）の四編纂所において行われている。またハノーファーの Leibniz-Archiv は近

2) 付表 1 と 2 のデータは Siegmund Probst, "The Mathematical Writings of Leibniz in Paris (1672–1676): An Overview", Plenarvortrag zum XI. Internationalen Leibniz-Kongress, am 4. Aug. 2023 による。データを提供下さったライプニッツ・アルヒーフの Probst 博士に御礼申し上げる。

年、狭義の「アルヒーフ」の概念を超えて、国内外のライプニッツ研究のための「研究センター」であろうと積極的に努めている。

【参考】

アカデミー版刊行計画の上方修正

2008 年時点（既刊 41 巻）：全 108 巻

2018 年時点（既刊 57 巻）³⁾：全 108 巻。完結予定 2048 年
（2019 年 第 V 系列の準備作業に着手）

2023 年時点（既刊 68 巻）：全 133 巻。完結予定 2055 年

最近の画期的な出来事は、2019 年、それまで未着手だった第 V 系列（歴史・言語学著作）の編纂がポツダムの Leibniz Edition によって開始されたことである。まず数年は調査が行われ、その後編纂作業が開始されると聞く。これにより歴史家としての、そして（それと密接につながった）言語学者としてのライプニッツの著作が、「歴史的批判的エディション」によって提供されるとともに、近世初期における史料編纂の貴重な一次史料が明らかになろう。また、ポツダムは従来の第 IV 系列に加え、今後は二つの系列を担当することになる。

ちなみに、「アカデミー版」とは、それがドイツ各地の「アカデミー」が主導し、連邦と州から財政援助を受けて行うプログラムであることからそう呼ばれる。例えばポツダムの第 IV 系列は Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften の、ハノーファーの第 I, III, VII 系列は Göttinger Akademie der Wissenschaften の各事業である⁴⁾。出版元は、

3) インターネット暫定版 4 を加えると計 61 巻。

4) “Das Akademienvorhaben „Leibniz-Edition Potsdam“ ist Teil des von Bund und Ländern geförderten Akademienprogramms, das der Erhaltung, Sicherung und Vergegenwärtigung unseres kulturellen Erbes dient. Koordiniert wird das Programm von der Union der deutschen Akademien der Wissenschaften“. (ポツダム編纂所ホーム

2016 年以降はベルリンの Walter de Gruyter 社となっている。

なお、ハノーファー、ミュンスター、ポツダム、ベルリンの各編纂作業の現況と課題については、毎回国際ライブニッツ会議の会期中に、「ライブニッツ編纂室報告」という部会が設けられ、各編纂室の代表が 30 分程の報告を行ない、その原稿は各大会の講演記録に印刷される。先の第 11 回会議（2023 年夏）では 2 日目午前に開催され、Knobloch 教授の司会の下、Kempe、Meier-Oeser、Li、Luckscheiter、Siebert 氏が報告した⁵⁾。この編纂室報告には毎回多くの参加者があり、その報告文は研究への必須案内である。またミュンスターの Kliege-Biller 博士がアカデミー版（哲学著作）のテキスト、校訂、検索の利用法を PPP 等を用いて懇切に講習するというセッションを、2016 年に続き 2023 年の大会でも実施した。

1・2 ライブニッツ協会（Gottfried- Wilhelm- Leibniz-Gesellschaft e.V. 1966 年設立）

事業 1：国際ライブニッツ会議の主催（第 1 回～第 11 回：1966–2023）
博士論文執筆者セミナーの共催（2011, 2016, 2023）

事業 2：専門研究誌 *Studia Leibnitiana* の編集・刊行（1966–）
—通常号（年 2 回 Heft 1, 2）
—特別号（*Sonderhefte*）
—補遺号（*Supplementa*）〔出版元：Franz Steiner Verlag, Stuttgart〕

ページより：<https://www.bbaw.de/forschung/leibniz-edition-potsdam>

5) “*Le présent est plein de l’avenir, et chargé du passé*”. *Vorträge der XI. Internationalen Leibniz-Kongresses*. hrsg.v. W. Li, Ch. Wahl, S. Erdner, B. C. Schwarze u. Y. Dan, Bd. I–III, Hannover 2023. 哲学に関しては Meier-Oeser, “Leibniz-Forschungsstelle Münster” が、A II, 4 (1701–1707) と A VI, 5 (Juli 1695–1703) の編纂、そして『弁神論』の巻の準備などについて報告している (Bd. IV (2024), S. 251–256)。

事業3：毎年10回程度、研究者だけでなく広く市民を対象とした公開講演会の開催。

北米ライブニッツ協会が一部には閉鎖的とも評されているのとは対照的に、ハノーファーのライブニッツ協会は積極的に全世界と連携するセンターであろうと努めている。協会の事務局は、ニーダーザクセン州立図書館（G. W. Leibniz -Bibliothek）内の四階、すなわちライブニッツ・アルヒーフと同じ階に設けられており、専任のスタッフが常勤している。

【ライブニッツ基金講座】《ライブニッツ没後三百年》の2016年を記念して、ハノーファー市によって Leibniz-Stiftungsprofessur が、2011年から2017年までの期限付で、市内のライブニッツ大学（旧ハノーファー工科大学）に設置された。就任した Wenchao Li 教授の主導により、また潤沢な公費に支えられ、ライブニッツ協会との密接な連携の下、毎年多くの国際学会が開催され、それらの発表原稿は *Studia Leibnitiana* の補遺号・特別号において次々と公刊され、ライブニッツ研究の拡大（新しい研究領域の開拓）と深化、そして一般への普及に貢献した。

1・3 ライブニッツ・アルヒーフ

ハノーファー市内官庁街の一角にあるニーダーザクセン州立図書館 NLB（G. W. Leibniz Bibliothek）内に設けられ、ライブニッツの全遺稿、書簡、蔵書などを厳重に収蔵。また館内の4階と2階にはライブニッツ・アルヒーフの研究員のための研究室があり、ここでアカデミー版ライブニッツ全集のための調査と編纂が行われている。さらに同図書館はライブニッツの一次史料、二次文献を収蔵する。さらに、手稿や往来信のオリジナルについても担当部署の館員が来館者の閲覧をサポートしてくれる。なお、同図書館は十七世紀史のコレクションでも知られている。

II. 今日のドイツ／ドイツ語圏におけるライプニッツ研究

2・1 概況⁶⁾

A. 四箇所のアカデミー版編纂所研究員が中心的役割をはたしている——
文献学的、歴史的研究

・ハノーファー：Heinekamp †, Totok †, Breger, Hess, Widmaier,
Babin, Gädeke, Probst, Kempe

・ミュンスター：Schepers †, Schneider, Meier-Oeser, Lorenz, Herma
Kliege-Biller, Leinkauf

・ポツダム：Rudolph, Li, Beiderbeck, Waldhoff, Luckscheiter

・ベルリン：Hecht, Stork

B. 大学を拠点とする研究者——体系的関心

Moll, Holz †, Knobloch, Poser †, Kaehler †, Busche

C. アメリカで活動している研究者——批判的で多様な問題設定

Goldenbaum, Jorati

D. 個別テーマに関する共同研究

Bredenkamp（芸術史）、Rudolph（政治哲学）、Gädeke（書簡）、Probst
（数学史）他

【付表3】近年の注目書から（形而上学、政治哲学、哲学史を中心に）

1. Heinrich Schepers, *Leibniz. Wege zu seiner reifen Metaphysik*,
Berlin 2014.

2. Wenchao Li, Simona Noreik (Hg.), *G. W. Leibniz und der*

6) なお近年（1988～2016年）の世界の研究動向については以下の拙論を参照いただければ幸いである：「世界のライプニッツ研究」（『ライプニッツのモナド論とその射程』知泉書館2013年、275-361頁）、「海外ライプニッツ研究動向（2013-2014）」（『ライプニッツ研究』3、2014年、203-217頁）、「第10回国際ライプニッツ会議」（同4、2016年、183-197頁）。

Gelehrtenhabitus. Anonymität, Pseudonymität, Camouflage, Köln/Weimar/Wien 2016.

3. Wenchao Li (Hg.), *300 Jahre Monadologie. Interpretation, Rezeption und Transformation* (= *Stud. Leibn. Suppl.*39), Stuttgart 2017.
4. Wenchao Li, Hartmut Rudolph (Hg.), *Leibniz im Lichte der Theologien* (= *Stud. Leibn. Suppl.*40), Stuttgart 2017.
5. Stephan Meder, *Der unbekannte Leibniz. Die Entdeckung von Recht und Politik durch Philosophie*, Köln 2018.
6. Irene Dingel, Michael Kempe, Wenchao Li (Hg.), *Leibniz in Mainz*, Göttingen 2019.
7. Friedrich Beiderbeck, Wenchao Li, Stephan Waldhoff (Hg.), *Gottfried Wilhelm Leibniz. Rezeption, Forschung, Ausblick*, Stuttgart 2020.
8. Günther Neumann, *Heidegger und Leibniz*, Nordhausen 2020.
9. Friedrich Beiderbeck, Nora Gädeke, Stephan Waldhoff (Hg.), *Scintillae Leibnitianae. Wenchao Li zum 65. Geburtstag*, Stuttgart 2022.
10. “*Le present est plein de l’avenir, et chargé du passé*”. *Vorträge des XI. Internationalen Leibniz-Kongresses*, Bd.1–3, Hannover 2023

2・2 2024年3月時点でみたドイツのライプニッツ研究——傾向と問題関心

■概観：ドイツのライプニッツ研究で顕著な分野としては、伝統的な形而上学および神学のほかに、2000年以降は国際的な動向とも重なり、とくに国家、法、歴史、政治などをテーマとする研究が前面に出て来た感がある。これは冷戦終結やEU拡大などにも触発され、あるいはまた2019年にポツダムにおいて新たに第V系列〔歴史、言語学著作〕の調査と編纂が

開始されたことも直接または間接に連動しているだろう。また、数学や自然科学・生命科学の研究も活発である（昨年夏の国際ライプニッツ会議では、従来になく多くの数学関連の部会が設けられていた）。全体として今日のドイツのライプニッツ研究は国際的な連携の中で進められており⁷⁾、ドイツ国内ではハノーファー、ミュンスター、ポツダム、ベルリンの四編纂所を拠点として進められている、と言えよう。

それでは哲学に関してドイツの研究状況はどうか。そして彼ら自身の目にはどう映っているのだろうか。この点を哲学書簡（A II）と哲学著作（A VI）を担当する現ミュンスター編纂所長の Stephan Meier-Oeser 教授に質問したところ、以下のような回答を得た：

今日ドイツだけに特徴的な傾向と呼ぶべき何かがあるかといえば、それはない。ただ、ライプニッツ形而上学の解釈をめぐる十年ほど前までは、英米系のいわゆる実在論的解釈に対して大陸欧州系の観念論的な現象主義的解釈という明確な区別はあったし、今も多少残っているかもしれない。しかしそれは重要性を減じている。その理由は、ひとつには、この手の議論はもう殆ど為されないからであり、もうひとつには、ライプニッツ形而上学についての知識がこの間はあるかに精緻なものとなり、一方か他方かという分け方はもはやできないことがはっきりしてきたからである。

ただ、ドイツのライプニッツ研究の特徴としてなお残っているものとしては、形而上学的テーマへの間口が他国より広いと言い得るかもしれない。しかし、今日のライプニッツ研究は EU さらには地球規模で国を超えた共同研究において行われているのだから、国毎の傾向を区別することはほとんど不可能になりつつあるだろう⁸⁾。

7) ドイツのライプニッツ研究者が異口同音に言うように、彼らの研究は良好な国際的連携に立脚している。例えば、前述の 2010～2017 年のハノーファー市ライプニッツ基金講座が推進したさまざまな新テーマの学会と論文集をはじめ、近年では、数学に関する独仏プロジェクト「マテーシス」(Probst, Rabouin)、政治哲学に関する (*Companion to Leibniz's Political Thought and His Political Activities* の刊行のための) 独伊西プロジェクト (Rudolph, Basso, Salas) 等があげられる。さらに 2023 年には A VI における『弁神論』の編纂準備のための独仏共同計画 (Lorenz, Meier-Oeser, Lalanne, Rateau) が始まった。

■現在ドイツで関心をもたれているテーマ・領域

(1) 「学者の共和国」 *res publica litteraria*

ヨーロッパのみならず中国にまで及ぶ他分野や他宗教の代表者たちとのライプニッツの文通ネットワーク。第 I 系列の編纂の進捗と連動しながら、ドイツでは Martin Mulsow (Forschungszentrum Gotha/ Universität Erfurt) と Nora Gädeke が (イタリアの Pasini や Palumbo とともに連携して) プロジェクトを進めている。.

(2) 受容史

・ドイツ観念論における受容: Hans Heinz Holz, *Leibniz in der Rezeption der klassischen deutschen Philosophie*, hrsg. und mit einem Vorw. vers. von Jörg Zimmer, 2015.

・文学における受容: Wenchao Li/ Monika Meier, (Hg.) *Leibniz in Philosophie und Literatur um 1800 (Studien und Materialien zur Geschichte der Philosophie, Band 91)*, Hildesheim 2016.

・18 世紀前半における受容: Nora Gädeke/ Wenchao Li (Hg.), *Leibniz in Latenz: Überlieferungsbildung als Rezeption (1716–1740) (=Stud. Leibn. Sonderhefte 50)* Stuttgart 2017.

・国家社会主義政権下の受容: Wenchao Li/ Hartmut Rudolph (Hg.), „Leibniz“ in der Zeit des Nationalsozialismus (=Stud. Leibn. Sonderhefte 42) Stuttgart 2013.

(3) 政治家としてのライプニッツ

Friedrich Beiderbeck, Irene Dingel, Wenchao Li (Hg.), *Umwelt und Weltgestaltung. Leibniz' politisches Denken in seiner Zeit*, Göttingen 2015.

(4) 政治哲学、法哲学、正義論

Stephan Meder, *Der unbekannte Leibniz. Die Entdeckung von Recht*

8) Meier-Oeser 教授の電子メール (4. März 2024) による詳しい回答に感謝する。

und Politik durch Philosophie, Köln 2018.

(5) 歴史家としてのライプニッツ：『西帝国編年史』（*Annales imperii*）、ヨーロッパ言語史研究、アカデミー版第V系列の着手（2019）について
Wenchao Li (Hg.), *Themenheft/Special issue: Die letzte Lücke schließen: Beiträge zum Start der Herausgabe von G. W. Leibniz' historischen und sprachwissenschaftlichen Schriften (A Reihe V)*, in: *Stud. Leibn.*, Bd. 53 (2021), 1/2, Stuttgart 2023.

(6) 言語と文化

Kai Pfankuch, *Theatrum mundi: Leibniz' Geister: vom Barock zur Moderne*, Hofheim am Taunus 2023

(7) 数学、情報学、自然科学

- Carsten Rathgeber, *Von Leibniz und Kant zu Daten-Analysen*, in: *Pädagogische Rundschau*. Frankfurt a. M. 2017, Bd. 77 (2023), 2, S. 195-204

- Jürgen Jost, *Leibniz und die moderne Naturwissenschaft*, Berlin/Heidelberg 2019.

(8) その他、注目される研究

- Michael Kempe, *Die beste aller möglichen Welten: Gottfried Wilhelm Leibniz in seiner Zeit*, Frankfurt a. M. 2022

- Friedrich Beiderbeck, *Wissenskulturen in der Leibniz-Zeit: Konzepte, Praktiken, Vermittlung*, Berlin 2021.

- Hannes Amberger, *Semina veritatis: Geschichte und Metaphysik bei Leibniz* (= *Stud. Leibn. Sonderhefte* 59) Stuttgart 2023.

- Sven Erdner, Michaela Hohkamp, *Leibniz und die braunschweig-lüneburgische Hausgeschichte: Leibniz' Suche nach den Vorfahren Azzos II. von Este zwischen 1685-1716 und sein Prioritätsstreit mit Lodovico Antonio Muratori*, Hannover 2023.

Ⅲ. ドイツのライブニッツ研究が今日直面する課題

第一に、ドイツはこの数年の間に、これまで（とくに論理学、科学論、哲学史、形而上学など）国内外の研究を牽引し、ライブニッツ協会を（理事や編集者としても）支えてきた Schepers, Poser, Kaehler の三教授を失うという深い痛手を受けた⁹⁾。その影響は先の国際ライブニッツ会議でも随所に現れていた。三教授亡き今のドイツでは、代表的なライブニッツ研究者をあげることは難しい、というのが同国関係者のほぼ一致した見解である。

さらに、イタリア出身でロンドンのキングズ・カレッジで教えた Antognazza 教授の急逝¹⁰⁾ も、彼女の最近のテーマが「信仰と理性」であっただけに、ポツダム編纂所前所長の Rudolph 博士らが進める普遍神学や新旧教会再合同計画などに関する国際研究にも打撃を与えた

第二に、近年ドイツの大学では改革の名の下に、哲学史に重点をおく講座が一扫されたが、このことはドイツのライブニッツ研究にも深刻な影響を与えた。今では大学で教えるライブニッツ研究者としてはハーゲンの放送大学に在籍する Busche 教授のみとなり、大学におけるライブニッツ研究者育成の道は絶たれた。先の国際ライブニッツ会議でも、ドイツからの大学院生クラスの参加者はほぼ皆無であった。僅かな博士論文執筆前後の若手も（留学生も含め）、大学ではなく、四箇所のアカデミー版編纂所（例えば、ミュンスター）で指導を受けている。大学がライブニッツ研究の場としてもはや機能していないという実態は、さらにアカデミー版編纂所の仕事にも影響を及ぼしている。すなわち、本来の遺稿・書簡の調査や

9) Heinrich Schepers (Münster), 1925.12.24–2020.1.1; Hans Poser (Berlin) 1937.5.25–2022.3.9; Klaus Erich Kähler (Köln) 1942.6.12–2022.6.16. 三教授とは筆者も親交があっただけに喪失感は大い。とくにポザー教授は2007年2月来日され、東京では学習院大学で講演されるなど、日本でも知る人は多い。あらためて御冥福をお祈り申し上げる。

10) Maria Rosa Antognazza (1964.9.10–2023.3.28).

編纂¹¹⁾に加え、(好むと好まざるとにかかわらず) ライブニッツ研究そのものに対してもさらなる役割を期待されるようになってきている。ドイツのライブニッツ研究の継続と成果は今後一層編纂作業において見出されていくだろう、と Rudolph 博士も予測する¹²⁾。

ライブニッツ・アルヒーフの Probst 博士も次のように警鐘をならす：「総体としてみるなら、残念なことに、ドイツ語圏のライブニッツ研究はさらに後退傾向にある（それはライブニッツ文献の10%にも満たない、と思われる）。その理由は、とくに、大学に於ける研究と教育における取り組みが不足していることに存する。いくつかの領域の研究は、アカデミープ版編纂所関連の出版によってカヴァーされている状態である。まずは緊急に諸大学でライブニッツとの取り組みが強化されることが望まれる」¹³⁾。大学の研究不振という状況は他人事ではなく、日本にもいずれ到来しよう。われわれ銘々が備えるべき深刻な課題である。

第三に、学術語としてのドイツ語を国際的な場でどう維持して行くのかという挑戦(Herausforderung)である。これはライブニッツ研究に限らず、哲学さらには精神科学研究全般に指摘されることである。(同じドイツのライブニッツ研究でも、数学系や科学技術系に比し、哲学系の研究者の危機感は小さくない)。Meier-Oeser 教授も、たしかに国際化は歓迎すべきであるが、その副産物として英語が“*lingua franca*”となり、ドイツ語の発表や論文は急激に減少し、しかも国際的には(とくに英米圏では)ほぼ認知されなくなるという事態を招いたと指摘する。それでは今後発信は英語でなされねばならないかといえば、そうではない。なぜならそれぞれの言語には特有の表現や叙述法があり、何語で表現するかは等価・無差別では決してないからである。ライブニッツ研究からのドイツ語の消

11) 現在各編纂所では、デジタル化の一環として、ライブニッツに関する研究データを機械に読ませ得る XMI などの Normdaten に移行させる試みが進められている。Michael Kempe 教授の電子メール (1. März 2024) での詳しい説明に感謝する。

12) Hartmut Rudolph 博士の電子メール (28.Feb.2024) での詳しい示唆に感謝する。

13) Siegmund Probst 博士の電子メール (26.Feb.2024) での詳しい示唆に感謝する。

滅は損失なのである。しかしだからと言って、“ドイツ語によるライプニッツ研究会”などは存在しないし、また望ましくもないだろう、として教授は、近未来には、DeepL や Google のような翻訳システムの利用によって、英語を読み書きする必要に迫られることもなくなるだろうと予想する。つまりドイツ語（イタリア語、スペイン語、フランス語であれ）で書かれているからといって、それを読まなくてもよいという理由にはもはやならない、と提言するのである。

IV. A VI, 4 の責任编者シェーパースが伝えようとしたこと ——原典に定位した体系的解釈

シェーパース（Heinrich Schepers 1925.12.24-2020.1.1.）は、アカデミー版全集第Ⅱ系列（哲学書簡）と第Ⅵ系列（哲学著作）の編纂を担当するミュンスター大学・ライプニッツ研究所所長を 1968-1997 年まで務め、1999 年には、本文 3 巻と索引 1 巻からなる A VI, 4 (1677-Juni 1690) を刊行した。また編纂作業へのデジタル技術（TUSTEP, 1978）の先駆的導入でも知られる。*Studia Leibnitiana* および同誌の *Sonderhefte* と *Supplementa* の共同编者も務め、ハノーファー、ポツダム、ベルリンの各編纂所とも協力し、アカデミー版全集の編纂とライプニッツ研究との結合に多大な貢献をした。

専攻は元々中世哲学であり、詳細な哲学史・概念史的方法によりライプニッツの普遍学構想や論理学、形而上学かんして、まさに世界のライプニッツ研究を牽引してきた。定年退官後も精力的に研究を続ける。論文「理性の旅—ライプニッツのモナド世界への理性の旅」は、生前最後となった 2018 年 12 月 14 日ミュンスター大学での講演を論文化したものである：*Iter rationis. Reise der Vernunft in Leibniz'Welt der Monaden*, in: *Stud. Leibn.*, Bd.49・2017・Heft 1, (2019) S. 2-27. 長年アカデミー版の編纂に従事した彼ならではの徹底した原文読解に基づく論文で、ラテン語原文の豊富な引用にはそのつど明晰なドイツ語訳が付されている。

ライプニッツ自身が言っていることを遺稿の解説により、正確に跡付け、その哲学的意味を再構成するシェーパースの手法は、奇をてらわず、骨太で明快である。同時にそれは、流行するさまざまな「間違っただけ」解釈への痛烈な批判を伴う。学界の論争でも、ライプニッツのラテン語著作（とくに *Scientia generalis* 関連）に精通する彼は、ライプニッツの書いたものを曲げずに受け取るならば「実体」、「理性」、「可能世界」はどう理解されねばならないか、という視点を一貫し、しばしば激しい論陣をはって来た¹⁴⁾。

この論文は、既に卒寿を超えた碩学の遺言ともいえるべき迫力をもち、裨益されること極めて大である。以下、同論文の主な主張——現在ドイツのライプニッツ研究者に（多少の相違はあれ概ね好意的に）受け取られていると思われる——を簡潔に紹介したい。

(1) 研究の意図

シェーパースは彼の文献学的で哲学史的な関心・目的についてこう強調する：「本論文の意図は、ライプニッツの形而上学の正誤を説くことではなく、それは一歴史家の課題でもない。私にとって大事なものは、彼の信頼すべき言表に照らして様々な誤解を除去し、彼にとって明晰な仮定による諸推理のもつ合理性を表示することである」(S. 2)。「この旅は、読者に、彼らをよくある誤謬から隔てながら、ライプニッツ形而上学への完全にしてシンプルなガイドを供給する」(S. 2, Abstract)。

(2) 理性主義者 (Rationalist) ライプニッツ¹⁵⁾

ライプニッツはキリスト教信仰に立ってはいるが、しかし理性の許す限

14) 自らの A VI 4 (1999) の序文を、“Soft Rationality”を掲げて批判したダスカルに対するシェーパースの反論は重要である。Heinrich Schepers, *Non alter, sed etiam Leibnitius. Reply to Dascal's Review Ex pluribus unum?*, in: *The Leibniz Review*, vol. 14, Dec. 2004, pp. 117–135. また、第9回国際ライプニッツ会議（2011年）では、可能はいまだ個体として決定されているとはいえ、そこに一種の自由を認めることができるとする Kaehler の解釈に激しい批判を加えた。酒井潔「第九回国際ライプニッツ会議」(『ライプニッツ研究』第2号, 134頁)。

15) 最も単純な概念への分析の徹底という「理性」ratio の役割は A VI, 4A 冒頭のシェーパースの序文でも強調され、これを書評したダスカルによって“radical reason rationality”

り、厳密化を試みる。「理性とは、秩序に従って進歩する真理の認識であり」、「神の自然的／本性的な声（la voix naturelle）である」（Grua, 138, Sep. 1698）（S. 2）。

さらに、「カントに一世紀先立ちライプニッツは、思惟のコペルニクスの転回を要請した、しかもはるかにラディカルに。すなわち、世界をわれわれの外なるものとしてではなく、われわれによって、理性によって／理性において産出されたものとして概念把握すべきだと考える」（S. 3）。シェーパースは「超越論的」の先駆をライプニッツに見出そうとする。

（3）形而上学の中心的位置

「実体の行為は、真の形而上学に達するためには通らねばならない玄関である」（A II, 3, 601-602, an de Volder, 1/11. Sep. 1699）（S. 3）。シェーパースによれば、アリストテレス以来実体は形相と質料からなるとされていたのに対し、ライプニッツは形相を[・]自[・]発[・]的[・]行[・]為[・]に、質料をその行為の[・]制[・]限[・]に[・]関[・]係[・]づ[・]け[・]る[・]の[・]で[・]あ[・]り[・]、これは画期的である。

ライプニッツを正しく理解し得るには、形而上学に属する知と、われわれの実際の世間知とを鋭く区別しなければならない。諸学は、主に後者の世間知、そして手工業、技術、文化、芸術、宗教等に奉仕する。これら経験に依拠する諸学をライプニッツは（パルメニデスのように）無視したのではなく、むしろ重視し、多くの著作を遺しただけでなく、アカデミーの設立や、そしてとくに普遍学の構想に尽力した。シェーパースによれば、自然神学、宗教、信仰は経験知に属し、かかるものとして普遍学の対象である（S. 15, Z. 2-3）

これに対して形而上学（充足理由への問い）は理性にのみ基づき、経験によって証明も反駁もされ得ない。ライプニッツが好んで経験の事例に言及するのは、「わかりやすくするためのメタファー」であって、「論証」ではない（S. 14, Z. 6）。

と呼ばれる。Marcelo Dascal, *Ex pluribus unum? Patterns in 522+ Texts of Leibniz's Sämtliche Schriften und Briefe*, in: *The Leibniz Review*, vol. 13, dec. 2003, pp. 105-165.

(4) 理性的思惟の対象としてのモナド

単純実体（モナド）は、感覚や常識ではなく、形而上学の対象に属する。「理性の旅」の出発点にあるのは「実体」（substantia）の定義である。能動的で（またそれが神でない限り）受動的なモナドは「私」であり、ただしそれは、身体がその可分性のゆえに廃棄されても存続するような「私」である（A II, 3, 601-502, an de Volder, 1/11 Sep. 1699）。「モナド」はただ理性によってのみ思惟され得るのであって、われわれは、例示やメタファーによってモナド世界から経験的世界に滑落しないよう、最大限の注意をする必要がある。モナドが「私」である、と言われる場合のその「私」とは、われわれの経験のなかで体験された私ではなく、「創造から最後の審判まで自分の行為に責任をもつ私」なのである（S. 4, Z. 5-6）。

モナドの「表象」（perception）も、シェーパースによれば、度々誤解されているように素朴な知覚ではなく、むしろ「全世界の現在と過去との状態であり、より正確には、実体と整合的なすべての諸実体の現在の状態を意味する」（S. 6 u.）。モナドは窓をもたないという点にかんしてもシェーパースはブレーデカムプの『モナドの窓』¹⁶⁾を「芸術史家の悪いギャグだった」と批判し、「外界はただ現象としてあり、現象を産出する理性的モナドに対してのみある」と言い切る（S. 13, Z. 3-6）。

さらに「世界」はすべての整合的な単純実体の共同体である。「表象はモナドの内的状態であって、外的事物を表現する」とは、まず外物が有って然る後これに対応した内的状態があるという意味ではない。むしろ、外物はモナドがそれ自身のなかで／によって能動的に産出する現象である（S. 6, Z. 2 v. u.）。物体も身体も単純諸実体の合成であり、実体ではない。

(5) 可能性、神の予知

世界は、可能的なものの整合性である。個はかならず一つの世界に対応し、transworld-identity はあり得ない（S. 10, oben）。神以外にはどの実

16) Horst Bredekamp, *Die Fenster der Monade. Gottfried Wilhelm Leibniz' Theater der Natur und Kunst*, Berlin 2004.

体にも A と non A とがあって、神はこの両方を知っている。

したがって神の決定は、人間が自由に行為することに何ら影響を与えない、とシェーパースは言明する。可能を神は創造したのではなく、自らの理性のなかに見出したのである。神が選択するのは、善の理由に基づいて自ら決定するような被造物である。「それ自身を行為へ決定する能力にこそ、自由というものの本性が成立する」(A VI, 4B, 1451, Z. 13)。神は、創造を決心するに先立って、すべての可能と、(可能の概念に含まれている) 偶然的出来事のすべての結果とを完全に知っており、それが現実に存在することが神の知恵と完全に一致すると神が予知したもの(の概念)を選択した(GP IV 476) (S. 12, Z. 1-2)。神は必然真理も可能も作らず、観るだけである(神はスピノザの言うような「自己原因」ではない)。この点もシェーパースが生前の諸論争で厳として譲らなかった所である。

可能の全体をライブニッツは、すべての個体概念がそこに座をもつ「可能の領域」と呼ぶ。それは諸事物の現実存在や時間に関わり、故に神の自由な決定に依存する¹⁷⁾。つまり、一般概念が無時間的で、論理学の対象であるのに対し、個体概念はその個体の全歴史を包含し、形而上学に属する(S. 17)。(この点をアルノーは理解できなかった)。

(6) 人間の自由

一々の可能、一々の個体は、無数の可能世界の一つと正確に対応する

17) 可能なるものは既に個体として個別的である、というシェーパースの主張について、筆者には今なお鮮明な記憶がある：2001年9月ベルリンで開催された第7回国際ライブニッツ会議の三日目、筆者は「Leibniz und Nishida. Unterwegs zu einer Monadologie der geschichtlichen Welt」と題する発表を行ない、絶対矛盾的自己同一の歴史的世界において個はどこまでも否定しあうなかで真に個となる、という西田幾多郎の論に言及した。質疑になると、それまで会場の後方でじっと聴いていたシェーパースが、個は歴史的世界で初めて個となるのではなく、すでに可能として確定しているとつよく反論した。私は、西田では、ライブニッツの(いわば天使的な)モナドロジーは「歴史的世界のモナドロジー」に転換されると答えたことと記憶するが、彼は不満げであった。同日の夕方のレセプションでは彼の方から私のところに来て、現実世界のなかで相互にぶつかりあい個に決定されるといってもそのためにはすでに可能がそれなりに個でなければならないでしょう、と今度は穏やかな口調で補足した。私は半ば理解しつつもなお半ば納得できなかった。だが二十余年を経た今、その時にシェーパースが言わんとしたことがいくらかは咀嚼できるように思う。質問と爾後のフォローをして下さった教授にあらためて感謝と追悼の念を表したい。

(S. 18, Mitte)。そのうえで単純実体は[・]自[・]発[・]的[・]にその全歴史を構成する。シェーパースによれば、そのつどの表象とともに、単純実体は、或る行為をしたり（A）しなかったり（non A）を[・]自[・]分[・]で決定するのであり、それによって、そのつど、特定の、既存の、可能な個体が、その個体概念ともどもアクティベートされるのである。その場合当の個体は、先行する歴史は同じであっても、新しい可能世界において新しい将来をもつのだ、とも説明される。単純実体は、自由な行為によって、別のすべての単純実体とともに、初めて時間と空間を構成する。というのも、単純実体はかならず「ここ」と「今」において行為するからである（S. 18, u.）。

(7) 神の知性、形而上学

どの個体の概念も、その個体の属性（A と nonA）のすべてを含む。ヴィットゲンシュタインはこのことを「論理空間」として解したが、それは現在に限られている。対してライプニッツは、個体の全歴史を包含する「個体の完足的概念」を主張するのである。シェーパースは、「このことは思惟と存在の Isomorphie に対応する」（S. 19, Z. 9 v. u.）と言う。

一般概念の分析を旨とする論理学と違って、形而上学は、〈理由への問い〉と〈本性上より前のものからの帰結〉を内容とする。単純概念ならぬ神こそが最も前なるもので認識されるべきものである（S. 19, u.）。

物体・身体の *realitas* は、それが単純実体に基礎づけられていることから帰結する。つまり、或るものがまさにそのようなものとして現実存在しうかを決定するのは形而上学であって、論理学ではない。もちろん経験は現実存在について多くのことを示すのであり、ライプニッツは決して所謂 Idealist でも Materialist でもないのであるが。

上のことと関連して、さらにシェーパースによれば、ライプニッツでは「分析命題」と「総合命題」（Existenz の言表）の区別がとくに主張されている訳ではなく、その点でカントに追随したラッセルの解釈¹⁸⁾は誤り

18) Vgl. Bertrand Russell, *A Critical Exposition of the Philosophy of Leibniz*, London 1900, chap. II, §11, p16: "As regards the range of analytic judgements, Leibniz held

である。ライプニッツが主張しているのは、「理性真理」（一般概念にのみ関わり、矛盾律に従う）と「事実真理」（充足理由律を要する。そして個体を性格づけ区別する歴史の視点を入れて、個体を言い表す）の区別なのである（S. 16, Mitte）。

(8) 様相概念

ライプニッツの形而上学において重要なのは、真理の様相よりも、むしろ存在の様相である。シェーパースは、デカルトともスピノザとも違うライプニッツの功績として、起こり得る事のなかに「可能なだけの単なる可能性」を承認した点をあげる（S. 20f.; Vgl. *Confessio philosophi*, 1672/73 (?)）。つまりライプニッツによれば、それ自身のうちに理由をもつものは数学的真理と神の存在だけで、それ以外のものは、創造を承認すれば帰結するような偶然的なものである、つまり仮定的にのみ必然的なものである。これにより、ライプニッツは「可能なだけのもの」を擁護するのだ、とシェーパースは言う（S. 21, u.）。

神が一旦選択した後個体は確定するが、だからといってライプニッツはDeterministではない、とシェーパースは注意する。神の決定の際に対象となるのは特定の個体だけでなく、（可能的諸世界の一つとしての）可能の全系列であり、それは過去、現在、将来の状態を含むのである。偶然または事物の現実存在は、矛盾律ではなく完全性原理に基づく。現実存在するものは（神を例外として）すべて偶然的なのである（S. 24, Z. 4）。たしかに、将来の偶然的なものの真偽（自由なものの真偽も）は「確実」ではあるが、それは自由や偶然性ということと整合的なのである（S. 24 Mitte)¹⁹⁾。

that all the propositions of Logic, Arithmetic and Geometry are of this nature, while all existential propositions, except the existence of God, are synthetic.

19) この最終講演を含む *Studia Leibnitiana*, Bd. 49, 2017, Heft 1 の次の号 Heft 2 には、シェーパースの別の論文 *Leibniz' frühe und dauernde Metaphysik. Sein Brief an Wedderkopf mit Konsequenzen* が掲載されている（S. 130-138）。Wedderkopf 宛書簡（1671 年 5 月頃）には、「自由」について既に後の『弁神論』の諸要素が認められるという主旨。ライプニッツを決定論者とした R. M. Adams, *Leibniz. Determinist, Teist, Idealist*,

おわりに

シェーパースは、上に見たように、自分の研究の目的は、ライプニッツ哲学への評価（同意または反論）ではなく、明らかな誤解を除去し、ライプニッツの議論が、もしその前提を受け入れるなら、合理的なものであるということを可視化するだけだと言明する。この控え目な姿勢は、アカデミー版を国家事業として継続し、多額の公費と民間の助成を入れて国際ライプニッツ会議はじめ多くの国際学会を主催し、一次史料や、研究者のプラットフォームを積極的（献身的）に提供し続けるドイツのライプニッツ研究全体の考え方を代弁してもいいのではないか。そしてそれはシェーパース亡き後も基本的には継承されて行くだろう。昨夏のアムステルダムでの国際ライプニッツ会議を振り返ると、あらためてそう思えるのである²⁰⁾。

1994 を批判している。本最終講演とも関連する点が多い。

20) 本稿は、日本ライプニッツ協会 2024 年春季大会二日目のシンポジウム「海外のライプニッツ研究」（2024 年 3 月 10 日、於・石川県政記念館しいのき迎賓館）における筆者の提題「ドイツのライプニッツ研究」の原稿に修正と加筆を施し、さらにⅣを書きおろしたものである。なお、『ライプニッツ研究』第 8 号（2025 年 3 月刊行見込み）には、上記大会当日の原稿（Ⅰ～Ⅲ）を約五分の一に圧縮したバージョンが掲載される予定である。